

4 出土遺物

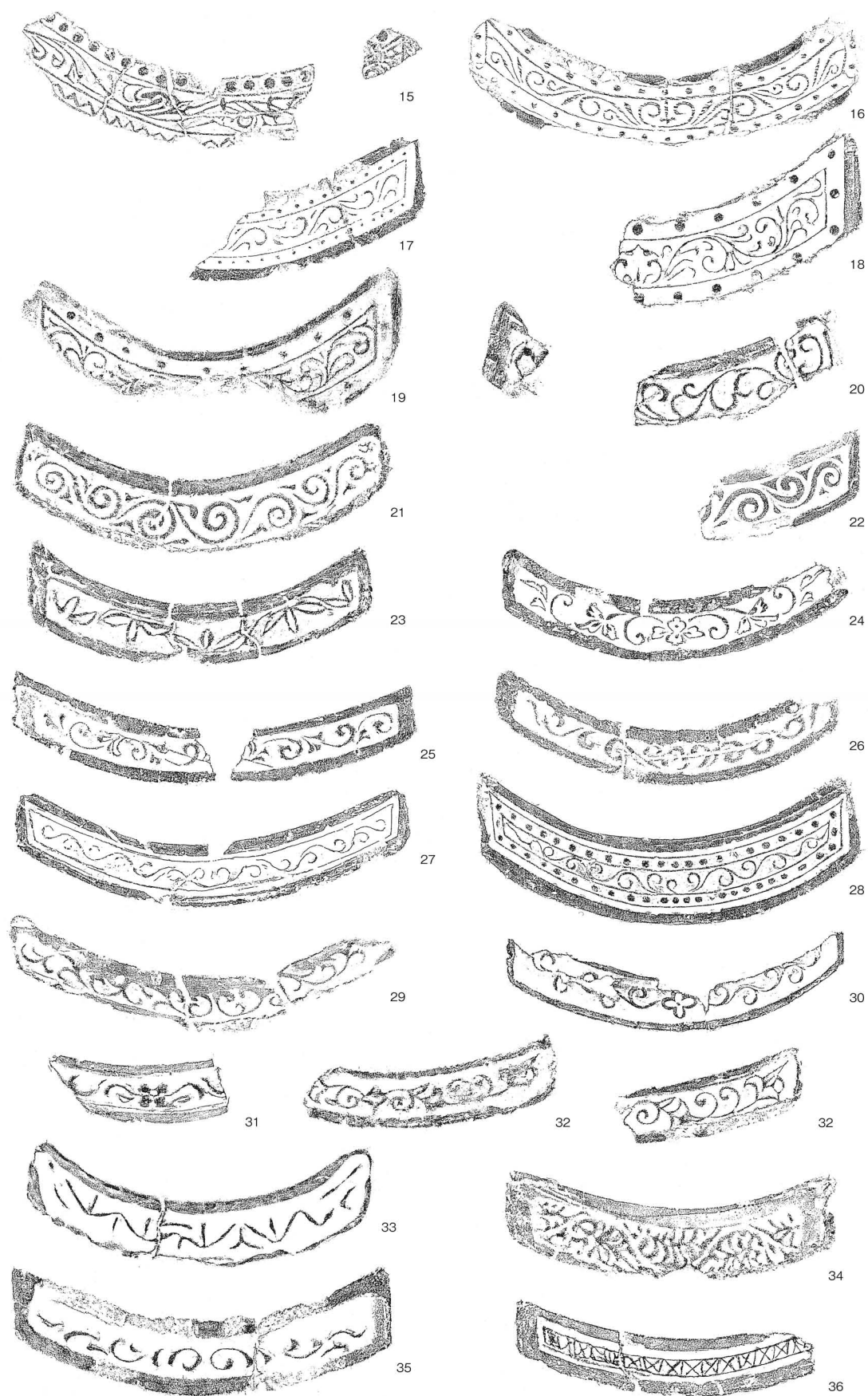
(1) 瓦磚類

本調査で出土した瓦磚類は、軒丸瓦273点、軒平瓦303点、鬼瓦2点、面戸瓦17点、留蓋瓦1点、刻印瓦68点、ヘラ書き4点、その他28点、丸瓦1,508kg、平瓦4,428kg、磚1.8kg、凝灰岩59kgである。以下では瓦溜SX9947・9953・9954の出土瓦を中心に報告する。同範瓦については奈良国立文化財研究所『興福寺食堂発掘調査報告』1959年（以下『食堂報告』）と興福寺『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1978年（以下『防災報告』）を参照した。SK9963からは奈良～平安時代の瓦が出土した。詳細については『奈良文化財研究所紀要2012』に報告した。

軒丸瓦は59点を数える（第23図）。1は外区に珠文のない蓮華文で、中房の珠文は1+4である。2の中房の珠文は1+4で、外区珠文帯は珠文の周囲が深く円形にくぼんでいるのが特徴である。『食堂報告』3に近い。3の花弁は扁平で外区の珠文もまばらである。『食堂報告』44と同範か。4は梵字のアーチで2点出土した。5～14は巴文でいずれも巴頭の先端が尖る特徴をもつ。5は外区に珠



第23図 瓦溜SX9947・9953・9954出土の軒丸瓦 1 : 4



第24図 瓦溜SX9947・9953・9954出土の軒平瓦 1 : 4

文のない型式で『防災報告』55と同範であろう。6は巴文の中心に珠点がなく、周囲に圈線がめぐる。『食堂報告』96に近い。7～9は中心に珠点があり、外区珠文帯の内外にも圈線がめぐる。7の珠文は24、8・9の珠文は22以上ある。7は3点出土した。10～14は中心に珠点のない巴文で、外区には珠文帯がめぐる。10・11の巴はやや扁平で、外区珠文帯の内外に圈線がめぐる。10の珠文は29で11は珠文が少なく、10は3点出土した。12～14は珠文帯の外側に圈線がない型式である。12・13の巴は扁平で圈線も太い。12の珠文は18である。珠文にみられる範傷から12・13は同範の可能性が高い。14は巴頭が大きくなり、巴の断面も半円形に近い。1～10は永承の火災以降の平安後期に属し、11～14は平安後期あるいは中世に降る可能性もある。

軒平瓦は88点出土した（第24図）。15は偏行変形忍冬唐草文6645Aで段顎である。16は6682Dで12点出土した。段顎で平瓦部凸面には縦位の太い縄タタキをほどこす。17は6721Cで曲線顎Ⅱである。18の6732Eは曲線顎で平瓦部凸面にはタテケズリをほどこす。以上は奈良時代の瓦である。

19は複雑な均整唐草文で外区には珠文をめぐらす。曲線顎で、平瓦部凸面には縦位と斜位の縄タタキをほどこす。平安前期の瓦である。20は偏行唐草文で2点出土した。『食堂報告』60と同範であろう。21・22は線の太い唐草文で、浅い段顎である。22は『防災報告』161と同範であろう。23は紅葉形の文様を飾り、浅い段顎である。2点出土した。『食堂報告』78と同範である。24は花文と唐草を組み合わせた文様で浅い段顎、3点出土した。『食堂報告』70と同範であろう。25は唐草文の中央に斜線がはいる。この2点は別個体だが、同範の可能性が高い。計6点出土した。『食堂報告』72・73も異範としているが、本稿の25と同範の可能性があろう。26は浅い段顎である。27は簡化した唐草文で浅い段顎、28は外区に珠文を配する型式で曲線顎である。29は幅2cmほどの顎面をもつ低い段顎につくる。30・31は中央に4弁の花文を配し、浅い段顎をもつ。32の2点は同範で曲線顎をもつ。33・34は唐草が相当に簡化したもので、顎部が深い曲線顎である。33は2点出土した。以上は平安後期の瓦であろう。35は中心飾りのない唐草文で20点出土した。文様の右上隅に範傷がある。顎と平瓦部との境に凹型台の圧痕や強いヨコナデをほどこす例がみられる。36は×と□の組合せ文様で、凹型台の圧痕がみられる。平瓦部が狭端まで残存しており全長は26.8cmある。以上は鎌倉時代の瓦である。同遺構からは丸瓦・平瓦が多量に出土し、凸面にタタキをほどこす鎌倉時代の平瓦も目立つ。

このほか、包含層から緑釉の水波文磚が1点出土している（第25図）。水波文を浮彫表現しており全体に緑釉をかける。側辺は欠けるが、底面は残存しており、厚さは2.6cmある。文様と厚みは東金堂出土の水波文磚と同様である。

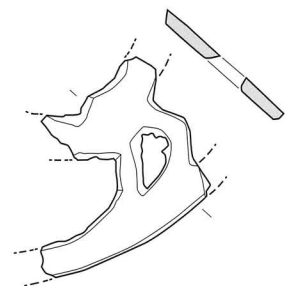


第25図 緑釉水波文磚

（2）金属製品

銅製品は飾金具1点のほか、柄金具などが出土した。鉄製品は釘や鏝などが多数ある。その多くは表土直下の盛土内か、近現代の土坑からの出土である。ただし、角釘も出土しており、古い時期のものも含まれる。銭貨は康熙通宝1点、寛永通宝10点などがあり、いずれも表土か盛土内からの出土である。

第26図は円形の飾金具。断片で全体形が不明であるが、外縁を含む意匠の一部が残存する。外縁と内区との間にはD字形の透かしがある。寸法は、長さ5.2cm、幅4.0cm、厚さ2.6cmである。淡茶色土出土。



第26図 出土金属製品 1：2

(3) 土 器

北円堂院回廊出土の土器は、整理箱で31箱ある。大多数は回廊の基壇が削平されて以後に堆積した包含層からの出土だが、一部に東面回廊SC9950の基壇縁付近にある瓦溜や、南面回廊の基壇を南北に横断する暗渠SD9944、および基壇外装の抜取痕跡などから出土した土器がある。これらの土器群は、東面回廊の基壇が削平を受けた時期を知るうえで重要である。本書では、東面回廊で出土した鎌倉時代後半の土器群にくわえ、東面回廊東側の土器溜SX9967から出土した室町時代の土師器皿と、調査区西端のSK9966出土土器・陶磁器について述べる。

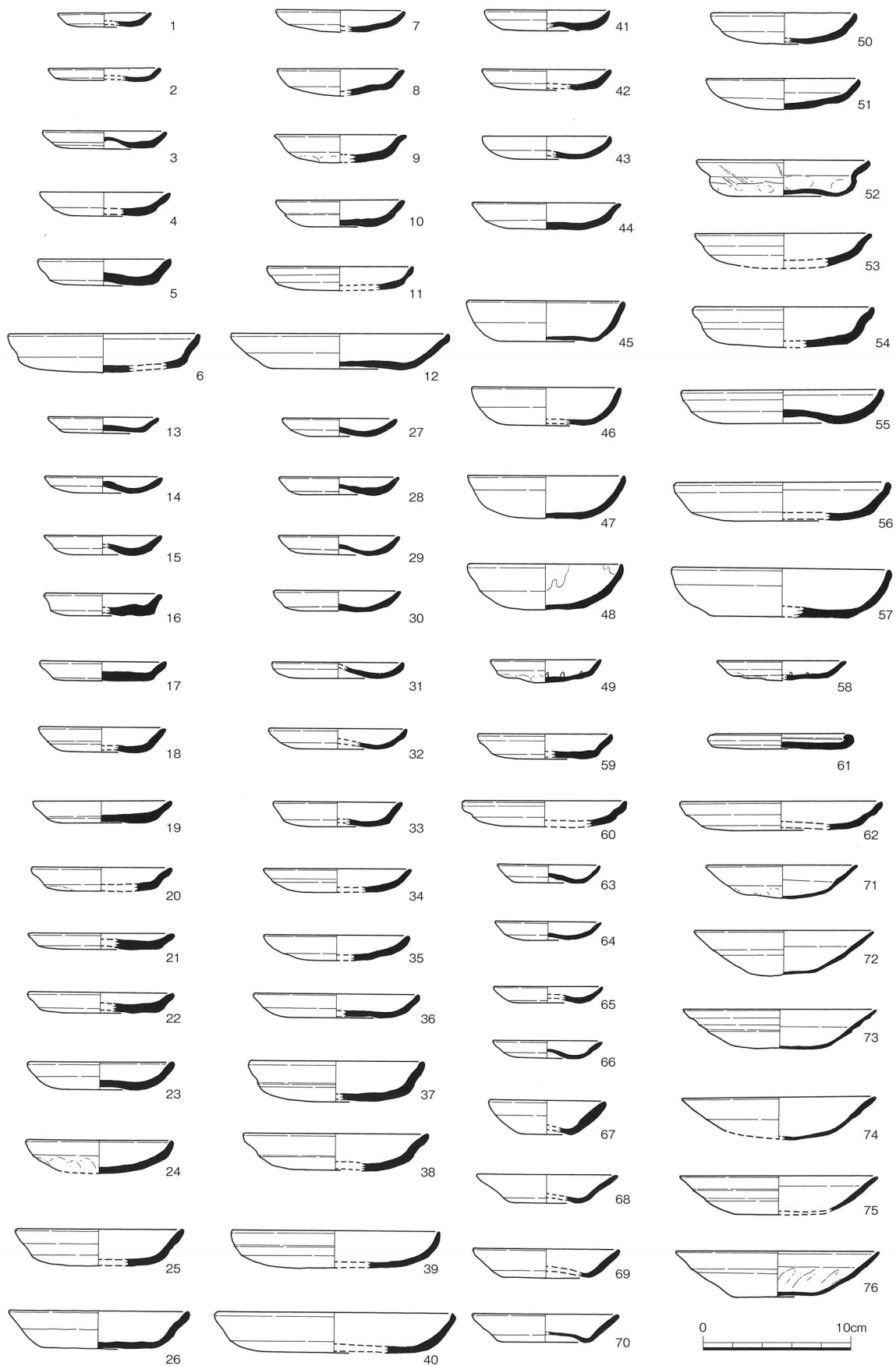
黄褐色土の土器 黄褐色土は東面回廊の東側にあつて、瓦溜SX9954の検出面にあたる土層である。断割調査で一部を掘り下げたところ、少量の土師器が出土した（第27図1～6）。土師器皿は一部に11世紀代の小片を含むが、多くは後述する瓦溜SX9954のそれと規格・器形が一致する。1～5は口径6～9cm前後の小皿、6は口径13cmの中皿。1・3は灰白色を呈し、3は口径8.4cmのいわゆる「ヘソ皿」である。これら以外はすべて褐色から橙色を呈し、胎土はやや砂質である。

基壇外装抜取溝の土器 東面回廊西側の基壇外装抜取溝SD9951B・9952Bからは、ごく少量の土器が出土している。多くは細片だが、土師器皿には口径7.5～10.0cmの小皿（7～11）と、口径15.0cmの大皿（12）とがあり、口径10.0cmの土師器碗もある。これらは多くが13世紀後半のものであろうが、大皿（12）は12世紀後半から13世紀にかけてのものか。土師器皿の規格や器形は瓦溜の土器に似るが、一部に室町時代の土器を含む。

瓦溜の土器 東面回廊では基壇縁に沿って瓦溜があり、回廊外側（東側）がSX9954、内側（西側）がSX9953である。出土土器はいずれも多量の瓦に混じていたもので、おもに土師器の細片からなる。SX9954の土器（13～26）とSX9953の土器（27～40・46～49）はほぼ同じ様相をみせる。すなわち、土師器皿が圧倒的に多く、瓦器や土師器土釜類がほとんどない。土師器皿には小皿・中皿・大皿の3種があり（13～40）、これに口径10.0～11.0cmの土師器碗（46～48）が加わる。瓦器はきわめて少なく、小皿（49）と碗の小片があるにすぎない。土師器小皿は口径9cmまでにいわゆるヘソ皿が多く、8～10cmには底部平坦で厚手のものが多い。中皿は口径12cm前後で、口縁部下半にヨコナデ時の屈曲を残す。これら小皿・中皿は大多数が13世紀後半に属するとみられるが、小皿の一部（23・24：南北断割出土）は底部と口縁部との境界が不明瞭で、12世紀後半から13世紀にかけてのものか。同様に、大皿（39・40）も古相であろう。なお、回廊外側の瓦溜では11世紀代の土師器皿や、15世紀代の土師器皿もわずかに出土している。

暗渠SD9944の土器 南面回廊の基壇を南北に貫く暗渠SD9944の埋土から出土した土器。この暗渠は、基壇の削平が進むなかで露出・埋没し、最後には瓦溜SX9953で覆われている。したがって出土土器は、北円堂院回廊の基壇が削平を受けて以後、埋没に転じた時期を物語るが、その内容は前述の瓦溜出土土器と同じである。土師器皿（41～44・50～57）の構成も、上位層にあたる瓦溜SX9953のそれと同様で、小皿・中皿・大皿の3種からなる。小皿・中皿は瓦溜のそれらと特徴を同じくし、およそ13世紀後半であろう。一方、大皿には口径14.0～17.0cmのもの（55～57）があり、12世紀後半から13世紀初頭にかけてとみられる。土師器碗（45）と瓦器小皿（58）がこれらに加わるものの、その割合は著しく小さい。このほかには瓦器碗や土師器高台付皿などもあるが、いずれも細片である。

瓦溜下層の土器 東面回廊西側の瓦溜SX9953下層から出土した土器も、おもに土師器皿からなる。59・60は土師器小皿で、口縁端部をわずかにつまみ上げるもの。61はいわゆるコースターで、口径



第27図 東面回廊SC9950出土土器 1 : 4

10.0cm。62は中皿である。

以上の土器群は、小皿（口径7.5～10.0cm）・中皿（口径11.5～13.0cm）・大皿（口径14.0～17.0cm）の3種からなる土師器皿を中心とし、これに土師器碗（口径10.0～11.0cm）と、ごく少数の瓦器が加わるという構成を示す。このうちの土師器小皿をみると、口径10cm前後で底部に丸みをもつもの（24・50・51など）と、底部外面の中央部を凹ませるいわゆるヘソ皿（13～15・27～32など）は口径9.0cm未満に多く、底部が平坦・厚手で口縁部が短く立ち上がるもの（17～23・33～36など）は口径8.0～10.0cmに多い。両者は口径のレンジが重複しており、ヘソ皿のほうが小口径である。ヘソ皿は、底部が平坦で厚手の一群よりはやや時期が降る可能性がある。中皿（6・25・26・37・38・52～54）は、口縁部の下半でヨコナデの屈曲が著しく、口縁端部をわずかにつまみ上げるのが特徴で、色調は例外なく橙色である。この中皿は、実際には口径が縮小した大皿の新相とみるべきか。一方、大皿（39・40・55～57など）は口縁部に2段ヨコナデの痕跡をとどめ、口縁端部を面取りする個体があり、小皿・中皿よりは古い特徴をもつものである。土師器碗（45～48）は暗褐色を呈するものが目立つ。瓦器皿は口径8cm前後で、内面見込みに粗いジグザグ状のヘラミガキを施す。

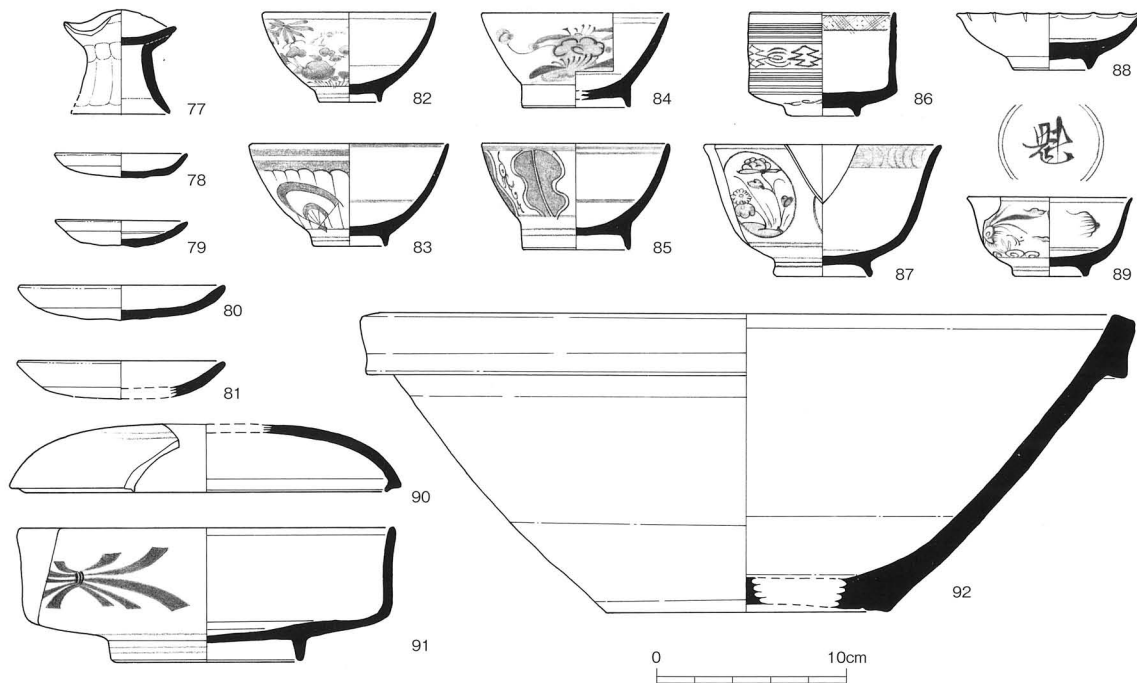
これらの土師器は、胎土がやや砂質で橙色ないしは褐色の一群と、胎土が精良で灰白色の一群からなり、前者が圧倒的に多い。褐色の一群は色相でいえば5YRから7.5YRの間にあり、胎土には金雲母や砂粒、クサリレキを含む。灰白色の一群は径2mm前後のチャート礫を含み、色相は10YRから2.5Yが多い。

以上のうち、土師器小皿と中皿は大小の関係にあり、これに土師器碗が加わるというセットをなすとみられ、13世紀後半から14世紀初頭に位置づけられるが¹⁾、小皿の一部と大皿には12世紀後半から13世紀までのものが含まれる。したがって、東面回廊SC9950の基壇縁付近に土器片を含む瓦溜が堆積し、開口した暗渠を埋めるなどしたのは、12世紀末以降、おもに13世紀後半から14世紀初頭にかけての出来事で、東面回廊SC9950の基壇が削平を受けたのはおよそこの時期か、それ以前のことといえる。つまり、基壇の削平と瓦溜の堆積開始はいずれも治承焼失（1180）以後である。一方、瓦溜の堆積要因はといえば、瓦の間に土器片が多数挟在し、しかも出土土器の推定年代にある程度の幅があることからして、治承焼失（1180）以後に復興なった回廊からの瓦の落下、すなわち再々建回廊の崩壊ということは考えがたい。

南面回廊SC9945は近世以降の削平・改変が著しいこともあり、内庭側の瓦溜SX9947の保存状態がかなり悪い。このため、土器の出土量が少なく検討に耐えないものの、土師器皿の器形および規格は、東面回廊出土のそれに一致する。南面回廊の瓦溜が堆積したのも東面回廊と同じ頃であろう。北面回廊内庭部の土器は、調査面積が狭いため出土量がきわめて少ない。

土器溜SX9967の土器 東面回廊の外側、回廊の東南隅付近で検出した土器溜SX9967からは、白色系の土師器皿が多数出土した。この土師器皿は、口径から小皿（口径6.0～8.5cm）・中皿（9.5～11.5cm）・大皿（12.5cm以上）の3種からなり、大皿は14.5cmを境にしてさらに二分できる可能性がある。小皿はいずれもいわゆる「ヘソ皿」である（63～66）。中皿（71）・大皿（72～76）は器壁が薄く、外方へと開く口縁部をもち、口縁部内面の中位付近に圏線状の段差を残す。これらは灰白色のいわゆる「白土器」で、胎土は精良ながら径2mm前後のチャート礫を含んでいる。

SX9967付近からは、赤色系の土師器皿もわずかに出土している（67～70）。厳密に言えば、68・69は瓦溜SX9954からの出土である。この種の土師器皿は瓦溜SX9954からも一部出土しているが、出土



第28図 土坑SK9966出土土器・陶磁器 1 : 4

範囲は土器溜の周囲にほぼ限られる。67や70と合わせ、もとはほぼ同位置で上位にある土器溜SX9967に包含されていたものか。これらの口径は8.0～10.0cmで、外方へと開く口縁部と、やや上げ底状の底部とからなる。色調は橙色から赤色で、胎土には砂粒を含む。

土器溜SX9967から出土した白色系の土師器皿は、類例の年代観²⁾を参考にするかぎり、15世紀前半に位置づけられる。また、赤色系の土師器皿は、厳密には土器溜からの出土ではないが、白色系の土師器皿とはほぼ同時期と考えられよう。土器溜SX9967が形成されるまでには、北円堂院の回廊跡や瓦溜は完全に埋没し、かつての東面回廊一帯は空地になったものとみられる。

土坑SK9966の土器・陶磁器 調査区西端の土坑SK9966からは、近世の土師器・陶磁器が出土した。土師器は「耳土器（みみかわらけ）」と呼ぶ神前供献用の箸台（第28図-77）と、口径7cm台（78・79）、口径10cm台（80・81）の土師器皿がある。耳土器は口径約6cmの土師器皿の両端を内側へ折り曲げ、手捏ねで成形した台脚を取り付けたもの。土師器小皿には灯芯痕がある。

磁器には肥前系の染付碗（82～87）とその蓋、染付皿（88）、蓋付鉢（90・91）と色絵碗（89）、色絵鉢、青磁大皿があり、陶器には京－信楽系の碗、皿、灯明皿、鍋、行平鍋や焼締陶器の鉢がある。磁器碗には丸形碗（82・83）、広東碗（84・85）、筒形碗（86）、端反碗（87）があり、18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。陶器鍋は2個体、行平鍋も2個体分あるが、細片が多い。

焼締陶器の鉢（92）は5個体ある。いずれも口径が40cm前後で揃り目を欠くが、内面の摩耗が著しい。揃鉢として使用したものと思われる。堺窯の産品か。

1) 同様の構成をもつ土器群には、奈良市によるHJ第531次調査の土坑SK16出土土器がある。奈良市教育委員会「平城京跡（左京二条七坊十五坪）・奈良町遺跡の調査 第531次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成17（2005）年度』2008年。

2) 奈良県立橿原考古学研究所編「平城京左京二条七坊」（『奈良県遺跡調査概報』1981年度、1983年）の井戸SE02出土土器群の年代観。